

# 津波の町に生きる

ルポルタージュ 3・11大津波

釜石の悲劇と挑戦

北原耕也

目次

I

浜風に涙もなくて ..... 9  
海を見つめる老人 II .....  
一通の会葬御礼 19 .....  
死者の叫びは届いたか 26

2

破壊された郷土 ..... 33  
釜石へ 35 .....  
悲劇は繰り返した 46

3

生死を分けたもの ..... 67  
消えた町 69 .....  
子どもたちはいかにして助かったか 79

混乱をきわめた住民たち 99  
人はなぜ逃げ遅れるのか 113

4 釜石の挑戦 ..... 123

犠牲者ゼロをめざす防災教育 125  
創意溢れる釜石東中学校の活動 139  
地域自主防災組織に見る先進例 144  
群馬大学片田敏孝教授に聞く 150

5 先人の教えに学ぶ ..... 159

落人一族の津波哀史 161  
石碑は語る 172

6 再生への道 ..... 185

求められる「想定外」への発想 187  
再び釜石へ 193

結びにかえて	206
.....	215

I

浜風に涙もなくて

## 海を見つめる老人

朝方ぱらついた雨は上がり、昼ごろになると、時折雲間から日が差した。六月の下旬、東日本大震災から一〇〇日あまり経った釜石市箱崎漁港は、ほのかに陽光を透かした乳白色の雲に包まれていた。風は東南より、心地好さに鼻を膨らませると潮の香がした。が、漁港にしては妙にかぼそく、ふだんなら容赦なく鼻腔を衝いてくる、あの魚と漁網の入り混じった濃厚なおいがない。

湾内には舟が数隻、主を失ってかいかにも頼りなげに浮かんでいる。いつもの年であれば、いまがウニ漁の最盛期はず。湾に蟻集しているはずの舟はどこへ行ったのか。

埠頭には波で外壁を打ち破られ、鉄骨が剥き出しになったままの倉庫が湾口を挟んで二棟、敗残兵のような姿をさらして建っている。舳い杭には黒ずんだロープが死んだ蛇のようにだらしなく絡まっている。

漁港の面影はもはやどこにもない。港は死んでいた。

背後から羽を軋ませて鴉が飛び立った。思わず振り返ると、目の前に一面、コンクリートの土台だけを残した廃墟が広がっていた。その向こうに、夥しい数の鯉のぼりが泳ぐでもなく中空にぶら下がっていた。

鯉のぼりは旧箱崎小学校の屋上から四方に張られた縄策につり下げられていた。その数およそ三〇〇。地元住民の発案で、いなくなつた住民に帰つてきてほしいという願いを込めてつり下げられた。「来い」の思いを「鯉」に掛けた。その願いは届くのか。しかし、吹く風に鯉が泳ぐほどの勢いはない。三月一日の大地震につづく大津波で、ここ箱崎では、二七五戸ある家のうち二三〇戸が流された。押し寄せた津波は廃校になつた一部三階建ての旧箱崎小学校をも呑み、高台の住宅地にまで迫つた。鉄筋コンクリートの校舎はかろうじて残つたが、周辺の家々は猛り狂つた波になぎ倒され、むしり取られた。死者・行方不明者は七〇人を超えた。

その死者一人ひとりの顔を思い浮かべようと試みる。もちろん、そんなことができはざがない。けれども、あらかじめ頭に入れてきたこの集落の成り立ちから、つい一〇〇日前まで暮らしていた人々の営みを想像できないことはない。

漁に出る漁師、網を繕う老人、庭の菜園で胡瓜を育てる老婆、箱崎トンネルをくぐり、あるいは南の桑ノ浜から両石を通つて勤めに出る一家の柱、そしてまた、スクールバスに乗り、根浜の海岸の道を鵜住居うのすまいの学校にかよう児童・生徒たち。だが、顔かたちはともかく、その一人ひとりの表情にまで辿り着こうとしたとき、いままがたまで死者・行方不明者七〇人超とひとくくりにしていた自分に軽い失望を覚えた。人は、たとえ死んでいようとも数ではない。

目を再び港のほうに転じる。その視線の先、東側の箱崎神社に向かう海岸沿いに、一つの人影を認

めた。体つきから老人のようだった。老人はその場にしゃがんで前方を見つめていた。いや、見つめているのかどうかもわからない。

海は風いでいる。その水面から崩落した突堤の残骸が突き出していた。水色の旗を差した浮標フカイが微かな風にも揺れながら漂っていた。

海猫が二羽、上空をゆったりと水平飛行している。海猫はときおり空中停止して海面をうかがうが、いつこうに降りてくる気配がない。

鴉が一羽、ぴよんぴよん跳ねて埠頭の先まで来、打ち上げられた材木の端にとまる。鴉はひとしきり海を眺め、ときどき何か考えるふうに首を傾げる。

動いているのはそれぐらいだ。湾は残酷なほど穏やかだった。

老人はただ前に顔を向けたまま、じっとして動かなかった。彼の目に何が映っているのか。彼は何を考えているのか。

その姿は、誰かと、何かと対話しているようであつた。また、誰かに、何かに耳を傾けているようでもあつた。

似たような光景を、私は訪ねた先々で幾度となく目撃してきた。南三陸町の志津川で、大船渡市の細浦で、同じ釜石市の唐丹とらにで、また石巻や女川や気仙沼でも、見たような気がする。

そこには決まって、じつと海のほうを見つめている老人がいた。老人は埠頭に佇み、あるいは瓦礫

の片割れに腰かけ、また浜裏の高台で傍らの木に寄り添うようにして、ただ黙然として海に向かっていた。

彼らが向き合っている相手が誰なのか、何なのか。そのようにさせているものは何なのか。私はそれを知りたかった。

そんな思いを抱きながら津波被災地を歩いてきた。

二〇一一年三月一日午後二時四六分という時刻がすべての始まりだった。

そのとき私は仙台市若林区の自宅にいて、大地震に見舞われた。この地震で家屋の大きな損傷は免れたが、家の外壁や内壁、家具類の倒壊など、小さくない被害を蒙った。

三三年前に襲った宮城県沖地震の経験と、九九パーセントの確率で近々大地震が来るという警告から、備えはそれなりにしてきたつもりだった。それがほとんど役に立たなかった。地震の大きさも衝撃的だったが、無力だったことがよほどショックだった。しかし、それはまだ、自分の身のまわりにはばかり気を取られていたわずかのあいだでのことだった。

携帯ラジオから伝えられた情報は、私の想像を根底からひっくり返した。いま思えば情けないことだが、当時私には、津波のことなど念頭になかった。いや、地震があれば津波が来る可能性があるという程度には考えていたかしのれない。けれども、切迫した問題だとは思っていなかった。

最初に飛び込んできたのは、同じ若林区の荒浜海岸に二、三〇〇人もの遺体があがったというニュースだった。荒浜海岸は仙台市蒲生から福島県新地町に至る全長四二キロメートルに及ぶ長い砂浜の、北側に位置している。遠浅で、夏になれば市民の海水浴場として賑わう浜である。そうした浜を襲い集落まで呑み込んでしまう津波とはいったいどんな津波なのか、津波を三陸と結びつけて考える癖がついていた私には想像もできなかった。

ニュースはつづけて、宮城県の石巻、女川、南三陸、気仙沼、さらには岩手県の陸前高田、大船渡といった聞き覚えのある市や町の名をあげ、それぞれが壊滅的、あるいは深刻な被害を受けたと報じた。

これらの市や町は私にとって深いつながりのあるところだった。石巻市は私の出身地で、同市や隣の女川町にはきょうだい、親戚が大勢住んでいる。南三陸町や気仙沼市、大船渡市には友人や知人も多い。

せめて、みんなが無事かどうかだけでも確かめたかった。だが、固定電話はおろか携帯電話も通じない。ならば駆けつけるしかないと思ったが、公共交通は完全にストップ、車を出そうにもガソリンも買えない有り様だった。そもそも道路がスタスタに寸断され、目的地に辿り着ける保証もない。足掻いてどうなるものでもなかった。結局、家のなかの片づけにも手が着かないまま、焦燥の一週間が過ぎた。

津波被害の情報は日に日に拡大、深刻化していき、死者と行方不明者はほとんど実感をともなわな

い数が増えていった。数は、増えれば増えるほど数値としての意味しか持たなくなる。死者も行方不明者も何万、何千といった数値に置き換えられ、津波前のその人固有の存在さえ消し去られていくような勢いだつた。恐ろしかったのは、それに何の疑いも持たず慣れていくことだつた。

身内や友人たちのうち何人かの無事がわかり、そのうちガソリンも手に入るようになって、ようやく女川町から南三陸町にかけて訪ねることができたのは、震災から三週間も経つてからだつた。その前に荒浜海岸の惨状を見、さらに被災者の取材を始めていた私は、そのころには多少の冷静さを取り戻していた。

にもかかわらず、いざ現地に立つてみれば、それもあつけなく崩れてしまった。

友人や知人たちが住んでいたはず場所は、戦場のような瓦礫の原と化していた。目印となるものは流されるか倒壊していて、自分がどこにいるのかさえわからないような状態だつた。私は茫然とした。驚くとか悲しむとかいう以前に、感情が動かなかつた。友人や知人たちの安否を気遣う気持ちすら湧いてこなかつた。途方もない自然の力を前にして、まったく無力な極小個体としてただ立ち尽くすしかなかつた。

私は何をするわけでもなく、海岸沿いの瓦礫のなかを歩きまわっていた。もしかすると、無意識に何かの痕跡を捜そうとしていたのかもしれない。

海を見つめる老人に会つたのはそんなときだつた。

結びにかえて

震災からすでに二〇〇日を過ぎた。復旧は地域ごとに速度のばらつきを生みながらも少しずつ進んでいるかに見える。けれども、現地に様子をはかれば、必ずしも進んでいるようには受けとめられない。

それは被災地の人々に現実の変化が見てとれないからだろう。瓦礫の撤去は進んだかもしれないが、そのあとの自分たちの暮らしが見えないのである。

皮肉なことだけれど、テレビを見ている人たちは復旧の進み具合を実感し、被災地に暮らす人たちは復旧が進んでいるとは実感できない。そんな現象が起きている。そうしたズレが生まれるのは報道に偏りがあるからではないだろうか。

茶の間に明るい話題を届けたいあまり、真実が見逃されてはならないと思う。もちろん、被災者の苦しみや悲しみを伝えたものがないとは言わない。しかし、そのあとには大抵予定調和的に、何倍かの効果をもって明るい話題が用意されている。その明るさで被災者の内奥にある苦悩がかき消されている。そんな感じがしてならない。

原稿を執筆中、被災した釜石東中学校の校舎に掲げてあった看板の文字が気になっていた。「限り」というその文字がいつたいたどのような文脈に置かれていたのか。初めそれを見たとき、私は「命の限り」とか「力の限り」とかひどくありきたりな言葉を連想していた。それでも本当のところを知らずには

いられなくて、ある日学校の村上洋子先生に電話をして確かめた。

先生は生徒たちが考えた言葉で「限りなき進花」だと教えてくれた。「進化」を「進花」に置き換えたのだ。その意味はわかる。私はその言葉に、中学生らしい伸びやかさと勇み立つような気概を感じとった。そして、こういう困難なときだからこそ、この言葉を押し上げている伸びやかさと気概を持って生徒たちには生きてほしいと願った。

釜石には延べにして半月取材に入った。そこでいろんな出会いがあった。取材協力者はもちろんだが、それ以外にも様々あった。市内甲子町に住む井上淑子さんもその一人だった。

井上淑子さんには取材中、宿を提供してもらった。大きな被害を受けた釜石市内には当然ながら宿泊できるところはなく、当初、遠野市内か花巻市内に宿を取ろうと思っていた。そんなとき、井上淑子さんから民泊させてくれるという話があった。私はそれに甘えた。

淑子さんの夫は滋さんと言い、四年前に亡くなった。その滋さんが、実は劇作家井上ひさしの兄さんだった。つまり淑子さんは井上ひさしの義姉で、義母は井上マスさんということになる。

そのマスさんについて淑子さんから聞いた話がある。すでに紹介したとおり、マスさんは釜石の呑ん兵衛横丁で飲み屋をやっていた。その店を出していたもつきりに、マスさんが「大津波」と命名していたのである。コップから溢れた酒が受け皿に満ちるまで注ぐのがもつきりで、そこから「大津波」になったのだろうと想像する。井上ひさしの母親らしいユーモアと、津波の町で生きていこう

という覚悟のようなものを感じる。それだけ、津波がみんなに強く意識されていたということでもあろう。

いま、世のなかの関心は福島第一原発事故に注がれている。生きてなお命の危険にさらされているのだから当然である。しかし、同時に、二万人もの犠牲者を出した津波被害も忘れてはならない。今回も、そして過去も、その恐ろしさを忘れたときに大きな災難を蒙っている。そうならないためにも、「自分の命は自分で守る」の精神で、日ごろから津波の襲来に備えておく必要がある。釜石の経験はそういう意味で役立つだろうと思っている。

本書の執筆にあたっては取材協力者のみならず多くの人たちの助力があつた。それが書き通す大きな力になった。わけても、不案内な釜石にあつていろいろとサポートしてくれた市内浜町在住の金崎安子さん、宿を提供してくれた井上淑子さんには感謝の言葉もない。彼女らの協力がなければ、おそらくこの本はできなかつた。また、原稿が計画どおり仕上がらないなか辛抱強く待つてくれた本の泉社の比留川洋社長、並びにスタッフの方々には心からのお礼を申し上げたい。

二〇一一年一〇月一日 東日本大震災から七カ月の日に

北原耕也

● Profile

**北原耕也** (きたはら・こうや)

1943年、宮城県石巻市生まれ。仙台市在住。

演劇活動、労働組合活動等を経て作家。小説のほかノンフィクション、  
評論などの分野でも執筆活動。

日本民主主義文学会会員。

主な著書

『さすらいびとのフーガ』(2009年1月、本の泉社刊)

つなみ まち い  
津波の町に生きる

——ルポルタージュ 3・11 大津波 釜石の悲劇と挑戦

---

2011年12月20日 初版第1刷発行

著者 ● きた はら こう や 北原 耕也

発行者 ● 比留川洋

発行所 ● 株式会社 本の泉社

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-25-6

電話：03-5800-8494 FAX：03-5800-5353

<http://www.honnoizumi.co.jp/>

印刷 ● 株式会社 エーヴィスシステムズ

製本 ● 株式会社 難波製本

---

© KITAHARA Koya / HONNOIZUMI INC.

2011, Printed in Japan. ISBN978-47807-0735-9 C0095

落丁・乱丁の場合は小社でお取り替えいたします。